

早乙女貢

無^む慘^{さん}妻^め敵^{かたき}討^{うち}



ケイブンシャ文庫 288

む ざん めがたきうち
無惨妻敵討

1989年5月15日 第1刷

著 者 早乙女 貢
発行者 加納 将光
発行所 株式会社 勁 文 社

〒164 東京都中野区本町3-32-15

電話 東京 (372)5021 (編集)
(372)3291 (営業)

振替 東京9-13311

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 明興製本工業株式会社

——定価はカバーに表示してあります——

著者と了解のうえ検印を廃します。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)



むざんめがたきうち
無惨妻敵討

早乙女 貢

ケイブンシャ文庫

目次

無惨妻敵討……………	六
淫雨ふたたび……………	三四
赤い蛍……………	六二
爛れる……………	九〇
痣のある女……………	一九
淫らな血……………	一四六
黒い乳房……………	一七五
若衆鬻は女の匂い……………	二〇二
一両の夢……………	二三〇
千鳥河岸……………	二五九
高麗橋に雉が哭く……………	二八七

無^む惨^{ざん}妻^め敵^{がたき}討^{うち}

無惨妻敵討

一

大御番衆の神尾源四郎が御城を退出したのは、夕七ツ半（五時ごろ）のことである。
霜月半ばしもつきのことで、日脚が短い。増上寺裏にかかるころは、宵闇がすっかりあたりを蔽っていた。

お城を中心にして発展した江戸の地理から見ると、このあたりは、なぜか遅れている。この寛文年間、まだどこどこに武蔵野の自然がそのまま残っていて、天を突く櫓の巨木や、雑木林がこんもりと小暗くうずくまったりしていて、日が暮れると、人通りも、殆どなくなる。

屋敷は中ノ橋から網坂を上って、三田の寺町の筋にある。

このあたり明暦の大火前はずっと畑地だった。寺町はその以前からあったもので、お寺だけ四十も五十も固まっている。

旗本屋敷が出来ても、寺町通りの名のほうが強い。

(淋しがっているだろうな)

帰路を急ぎながら、源四郎は、新妻のことを思っていた。

もう娶^{めと}って一年になる。が、初々しさは変らない。半年前の大火事で屋敷替えになって、神田からこの三田へ来たときは、淋しがって困った。

(まだ十七だからな。無理もない)

妻というより、妹という感じがする。幼さが残っている。ときどき、白痴^{ばか}じゃないか、とさえ思うくらい、無邪気なところがあって、それも源四郎には、楽しい毎日だった。

寺町にかかる藪の傍を抜けようとしたときだった。

ふいに茂みが動いた。がさつと、葉ずれの音がしたのである。以前、ここで坊主が斬られたことがあった。

それ以来、夜の往来には、自然と、緊張するものがあつたのだろう。源四郎は、さつと、身を躲した。ざわめきとともに、ひゅつと、槍の穂先が闇を突いて出たのである。

「何やつ！」

飛び退^{すき}ると同時に、源四郎は抜刀している。

さして使い手というわけではなかった。が、馬庭念流では、一応皆伝の腕だ。しかし、この奇襲をうけて、肩衣^{かたぎぬ}をはねる余裕もなかった。

「闇討ちか」

その大喝に、答えない。ひゅつ！ ひゅつ！ と、はげしく無言で繰りだしてくる槍先が

凄まじい。

源四郎は、これを受け流しながら、じりじりと坂を下った。

相手は中肉中背で、からだつきに特徴はない。誰とも判断のつけようがなかった。黒い布で面を隠しているのだ。

「卑怯な！ 名乗れ」

怒りが、源四郎のからだに、かっと血を漲らした。

名乗るくらいなら、覆面などしてこない。相手は、布の下でくくつと笑ったようだ。かなり自信のある槍さばきだった。

その上、一人ではなかった。左側の寺の築地から、ひらりと黒い影が、舞いおりて来たのである。

いや藪の中にも、同類はいた。それも二人。かれらは抜刀こそしていなかったが、襷がけに袴の腿立ちをとって、いつでも抜き合わせる恰好だった。

「うぬ、多勢で……」

源四郎は、はじめて不安を感じた。

相手は四人だ。夜はますます暗くなる。この時刻、通行人はほかにもとめられない。

「名乗れ、卑怯であろう。多勢での闘討ちとは……」と、かれは怒りをこめて叫んだ。「おれは直参、神尾源四郎、人に怨みをうけるおぼえはない」

「……………」

「人違いなら、退け」

「……………」

「無益の殺生したくはない」

その返事は、嘲けるようなあの笑い声だった。

頭巾をかぶったままの、そのくぐもった笑いは陰気で不遜なものだ。

「うぬッ、許せぬ」

源四郎は地を蹴って斬りこんだ。前面の槍を斬ると見せて、ぱっと、右へ飛んだのである。右側の腕組みした奴の肩先へ――

（斬った！）

と、思った。とたんに、もう一人の男が腰をおとして、掬い斬りに、はねあげている。たしかに刃先は触れた。が刹那に、払われて、闇に火花が散った。

普通なら、源四郎の刀は巻き上げられている。じーんと痺れが手から肘へ走った。辛うじて、刀を離さなかったのは、四人という敵の数が、かれの緊張を強めていたからである。

源四郎は二、三步身を躲したがよろめいて、どっと築地にぶつかった。

その胸へ、突然おうりゃアと、奇妙なかけ声で槍が延びた。夢中で払う。

この槍術のくせが、その間にわかつている。

はげしい突きのあとに、牽制の小さきぎみの突きが三、四、ときて、ぱっと殴りにくる。その勢いの帰りが、双脚薙ぎにくる。

源四郎は、その呼吸をつかんだ。双脚を薙ぎに來た瞬間、かれは足をちぢめて宙に飛んでいる。

大上段にさっと劍をふりかぶつての真向唐竹割りである。双手^{もろて}斬りだった。

斬られる前から、槍の男は仰天した。斬られたような悲鳴をあげ、のけぞった。夢中で槍でふせぐ。がつつと、音がした。千段巻のすぐ下からななめに、ずばっと両断している。

その余勢で、尖^{きつさき}先が、男の額に入った。すーっと眉間まで斬り下げたのである。槍で受けなかったら、間違いなく、脳天唐竹割りになっていたろう。

「助けろ！……を」

たしか、その名前を口にした。思わぬ結果に、狼狽のあまり口をきいてしまったのだ。

咄嗟のことでその名前は記憶に残らぬ。新手が斬りこんできた。撥止ツと刃がからみ、鏢がらみになった。

頭巾をかぶつてはいたが、咫尺のところに敵の双眸があつた。はげしく喘いでいる。臭^{にお}いがした。

（はてな……）

何の匂いであつたか。その匂いをきぐるひまはない。眼には殺気がある。

二重眼のはっきりした眼であつた。源四郎はその白眼の黄いろい濁りを、

（忘れぬ）と、思った。

「人が來たぞ」

誰かが言った。坂の下から提灯の火がゆらいでくるのが見えたのだ。

「退け」「いや、まだ……」「いいさ、もう」「そうだな、もういいだろう」そんな私語がかわされている。

一体、何なのだ。その私語の中には源四郎への嘲りがあった。

源四郎の怒りは、四人がその退きざままで予習していたように、あざやかだったことだ。四人は、ぱっと一列に並ぶと、刃ぶすまを揃えて斬りかかってきた。

槍の者は、折れた柄を左手に穂のほうを右手に持って、刀のようにかまえている。斬りこんでくるのも、呼吸を揃えてのことだった。

四本の刃を眼前にしては、いかに剣客でも、容易ではない。四本の刃は、まるで一人でするように、同時に動き、同時に、源四郎に襲いかかる、と見せて、

「退け」

突然、ぱっと身を翻えたのである。四人は藪の中に走りこんでいる。

そこに路でもあるのだろうか、雑木林がつづき、文目あやめもわかたぬ暗闇なのである。

「うぬ、待て！」

源四郎は追いかけてようとしたが、藪や雑木林など踏みこんだこともない。肩衣袋でもあった。

提灯のあかりが坂を飛んできた。

「何事だ」

三人だった。やはり直参らしく、供を二人連れていた。

源四郎は肩で息をつきながら、苦笑した。

「待伏をされまして」白刃を拭った。「野盗の類いたぐひでござろう。その提灯が見えたので、逃げていったが」

「ほう、それは偶然、お役に立ったわけだ。おけがは」

「なに、四人とも、大したことはなかったゆえに」

「四人もいたのか」

掠り傷もうけた様子のない源四郎にその武士は驚いたようであった。

白金台町に屋敷がある。結城某という御具足奉行であった。奉行といっても、大したことはない。泰平の時代には、甲冑の埃払い、保管と修理を監督すればよい役目だ。四百俵くらいの御役料である。

「この藪など残っているから、野盗の狙い目となる。取除かねばいけません」

そんなことを話しながら帰った。

もどる間は、この「武勇伝」を妻に話そうと思っていた。どんなに驚き、そして四人を相手にしたかれの腕前をほめたたえてくれるかしれない。

だが、屋敷に入って、玄関に出迎えた妻の顔を見ると、その気持も消えた。

行灯をさげて玄関に出迎えた妻の千鶴は、気分が悪いようであった。疲れが見える。

「どうしたのだ」

思わず、氣遣う言葉が出た。

「ええ、少し……」

横になっていたらしい。髪がほつれている。行灯の明りを下から受けて妻の顔は、蒼く見えた。

「いかな、それは、すぐ医者を」

「いいえ、それほどではありません、どうぞ御心配下さいませぬように」

「だが……」

「いいえ、よろしいのです、もう」と、強いて、微笑した、「少し休みましたから、もう、治りましたわ」

「ほんとうか、大事にせねば……」

言いさして、源四郎は声を詰らせた。

微笑した妻の顔を、異様に美しいと感じたのである。

二

娶って、もう一年になる。いまさら、妻の美しさに息を吞むなど、いささかおかしい。だが、そう感じたのだ。

髪のはつれと、疲れて、けだるい微笑と、その行灯の明りを下から受けた白い面が、今まで、源四郎の知らなかった妻の妖しい美しさを描きだしていた。

四人の暴漢に襲われた危機を乗りきった歓びが、妻への愛を強く甦えらせていたのかもしれない。

斬り合いのことは多く言わなかった。隠しはしない。隠せるものでもない。

鬚はこわれ、髪は乱れているし、袴には血や泥がついていた。襟も汗がべっとりついていて、肩衣が二カ所裂けている。

「襲われたのだ」

と、言葉寡^{すく}なに、かれは言った。

「まあ、よく御無事で」

「四人いた。四人で斬りかかってきたからな、あれが半分の二人なら、間違いなく斬り伏せていたのだが」

「まあ、四人も」

「そのうちの二人斬った。いや、軽い。手傷を負わせたただけだが……」

「それでは、御目付に」

「明日、報告するよ。文書にせねばなるまい。明日は泊り番ゆえ、七ツ前に出仕すればいいのだが、早く登城しよう」

一人は肩を斬り、一人は眉間を割っている。これは手がかりになる。肩の傷はともかく、眉間の傷は隠せない。

「でも、どうして……物盗りか何かでございましょうか」

「であろう……だが、どうもいぶかしいことが多い」

「……………」

「まあ、ともかく済んだことだ。あの藪や雑木林をなんとかせねばならん、結城どのも話していた。われらはまだよいとして、女小供が、日が暮れてからは、他出も出来ぬ。御朱引内ごしゅびきで、左様なことがあつてはならぬな」

若いだけに源四郎は、すぐ、かっとなる。二十四歳という年齢は、正義漢で熱血漢だ。城中では軽格でもあり控え目になっているだけに、帰宅すると、鎖をはずされたように活々いきいきとなる。

晩酌——といっても、一、二本にすぎないのだが、それだけの酒で、いい機嫌になって、上役の無能を罵ったり、不正を難じる。

若い夫の熱に浮かされたようなそんな姿が、若妻には、頼母しく見える。いつも、うっとりとなって見上げていたものだ。

そして、源四郎がはっと気がついて、照れ臭くなって、話をやめるのだ。

「こんな話、そなたには面白くないだろう」

という、千鶴は、

「いいえ、どうぞおつづけ下さいまし。殿どのがたのことはよくわかりませぬが、あなたさまの、そんなお話しぶりが好き」

千鶴は眼を輝かせて言うのだった。二十四歳でも、若い妻にとっては英雄なのだ。